

最初の文学者 利根川 裕

詩人、小説家、翻訳家、評論家、随想家……なんと定義したらいいか、とにかく文学者とよばれる存在を、私が自分の目で見たと最初が、相馬御風氏である。当時御風氏は、郷里である新潟県糸魚川に隠棲していた。そして私は、たまたまそこで生れ育った子供だったのである。

文学史の上での相馬御風は、明治四十年代の自然主義文学運動で、島村抱月の活躍の随伴者ないし相続者として知られている。明治四十四年の雑誌『文章世界』の文壇人気投票の翻訳家の項では、隅外、逍遙、曙夢につづく第四位にあるし、評論家の項では、島村抱月の第一位のあと、何人かの早稲田系論客とならんで第七位を占めてい

る。そのころ、雑誌『早稲田文学』（実質的編集長であった御風は、文学志望の青年や新進作家に対しては、かなりの盛感をふるっていたらしい。文壇少なくとも早稲田系の）登竜の鍵を握っていたのだから無理もない。

時代が経ったいまとなつては、相馬御風の名は「都の西北……」の早稲田大学校歌の作詞者としてのほうが、むしろ著名かもしれない。

郷里の糸魚川での御風氏は、滅多に外出しない人であった。健康も関係していたのである。文人としての盛名は、少年である私の耳にもきこえていたし、氏の揮毫になる軸ものは、しばしば見ることができたが、かんじんの御本人は、門扉を閉じた住まいの奥深く

にいて、容易に人の目には触れなかった。小さな田舎町で文筆を業とする人間というものは、かなり理解しにくいものであった。人びとの尊敬には、不可解なものを敬遠するといった、一種のよそよそしさが含まれていた。

私が小学校五年か六年のときであった。町制施行何十周年かの記念行事があり、小学校の講堂では、学童によって、御風先生の童謡発表会が催された。この日はじめて、私はこの高名な人物を見ることができたのである。白髪長身の文学者は、袴をつけた和服姿で、一段高く設けられた席にいた。

この主賓は、謹厳克己の偉丈夫とちがってその表情はかなりあわただしく、感情のおもむくままに揺れ動いた。この人の気分は一定していないな、不遜にも少年はそう想像した。発表会がクライマックスになるにつれ、文学者にもあきらかに昂奮が押しよせていた。いまに泣くな、と少年はまたしても非礼な推測をほしいままにしていた。やがて私の直感はおたつた。会がいよ

いよフィナーレに近づいたとき、文学者は袂からハンカチをとりだし、子供のように羞らいながら顔を蔽ったのである。

私は小学校も中学校も、御風先生作詞の校歌で育った。そして二度目に御風先生を見たのは中学四年のときであった。戦争の真最中で、私の級友の二十人ほどが、少年航空兵となって出ていった。その壮行会の日、御風先生は講演にあらわれたのである。数年前よりはめっきり年老い、どこか老媪のおもかげがあった。やや女性的な声で、先生はやはり感情のおもむくままに語りつづけた。語ってゆくにつれ、感動が湧き出してくるようで、その自己感動を性急に伝えたいという焦りがあった。そのときの講演内容を、いま私は思いだせない。ただ、はげしくかきどくような、それでいて女性的情調の漂っていたその雰囲気だけは、いまも私ははっきりと記憶している。

戦争が末期になったころ、それまで町の人と疎遠であった御風氏は、にわかにな々と接するようになった。戦陣におもむく若者が、競って氏の揮毫を求めるようになった。

たのである。氏は暢達な文字で、若ものの生命の燃焼を讀える言葉をつぎつぎに記した。生意気さかりになっていた私には、この文学者の、こういう率直すぎる行動が、なにか痛々しいもののようにさえ思われた。

私が高等学校へ入るとともに、偶然の機縁で、私はしばしば御風先生宅へ出入りするようになった。もう健康はかなり悪く、二階の居間で、布団に横たわったままのことが多かった。私は相手の都合などそれほど意に介しない無礼な訪客であったが、いざ会ってみても、四十歳以上も年齢の開いている間柄では、結び目のある話が成立するわけもなかった。ただ一方的に、私が甘えていただけのことである。

ある日のことであった。先生は布団のうしろに起りあがり、低い声で歌を歌いだした。「鉄道唱歌」もあった。「海は荒波……」とも歌った。そして先生作詞の「カチューシヤかわいや 別れのつらさ」の、例の松井須磨子が舞台で歌った「復活」の劇中歌になったとき、先生は先生の事情から、そして私は私で、青年らしい感情から、いつのまにか、と

もに泣き声になっていた。

相馬御風氏が、中央文壇から離れて糸魚川に隠棲したのは、大正五年である。以後四十年近く、一度もこの地を離れなかった。ただ一つの例外は、大正七年、恩師の島村抱月が死んだとき駆けつけ、門弟代表として弔辞を捧げたときだけである。隠棲にあたって御風先生は「還元録」という一著を記している。具体的には記していないが、自然主義文学論の退潮挫折、抱月・須磨子の演劇運動が、微妙な翳を落しているのは否めない。それに、大杉栄らの新しい思想運動も、その隠棲の一因でもあったらう。それは一つの「転向」だったのかもしれない。

最後に先生にお会いしたのは、大学を卒業した私が、就職上京の挨拶に伺ったときである。不自由な身体でわざわざ階段を降りて玄関口までこられ、「元気でな」と力なくいわれた。それから一カ月ほどして先生は歿くなった。先生の命日は、昭和二十五年五月八日である。六十七歳であった。